

『こころの病を生きる：統合失調症 患者と精神科医師の往復書簡』 の当事者と医者への語りへのテキスト マイニング

小平朋江



いとうたけひこ



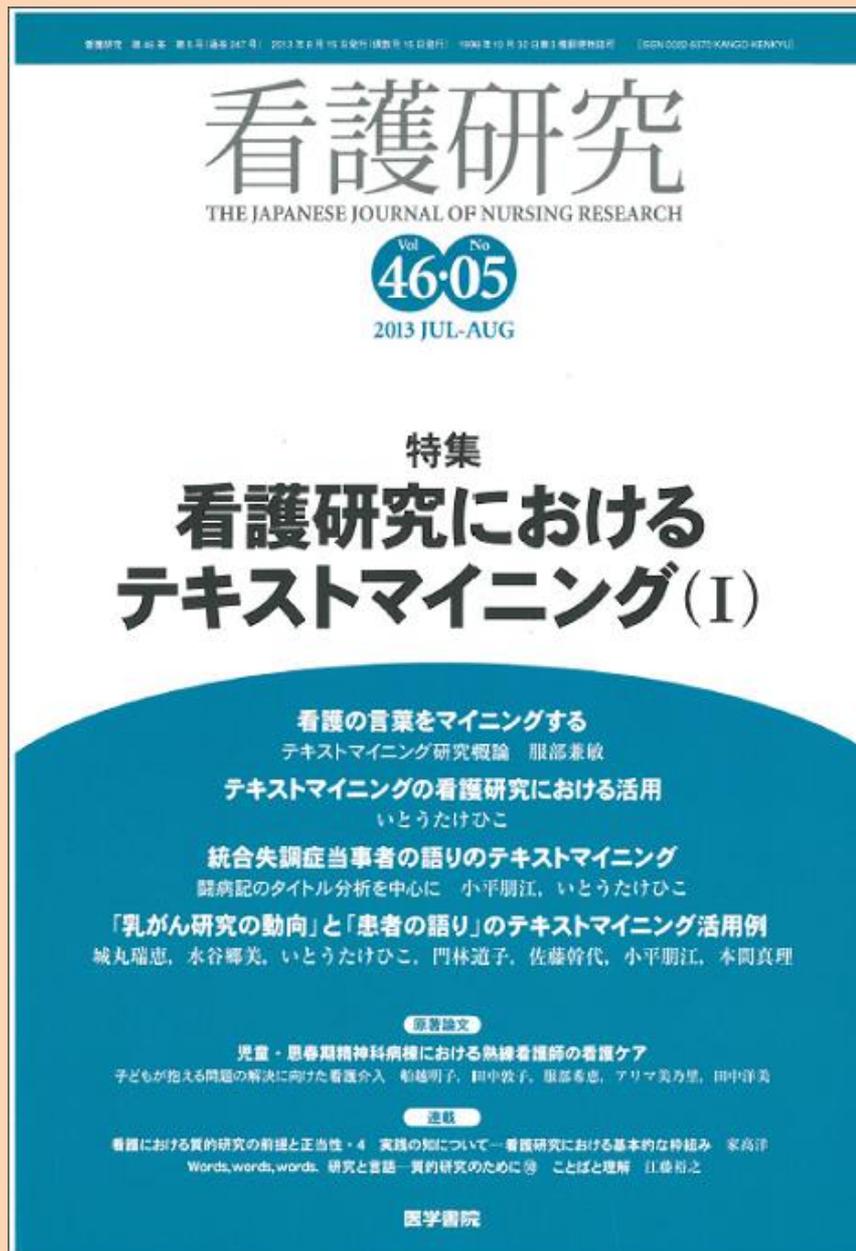
第33回日本看護科学学会学術集会

大阪国際会議場10F 1001-1003 P8-D-68

2013年12月7日(土)13:40-14:20

問題

- 当事者の語り(ナラティブ)には、当事者の知恵が豊かに含まれる。語りをテキストマイニングで分析する事の意義は大きい(小平・いとう, 2013)。⇒
- 217冊の統合失調症闘病記リスト(小平・いとう, 2012)のタイトル分析に取り組んだ。
- 看護学教育にとっては「ナラティブ教材」(小平・伊藤, 2009)としての活用を提案。
- 看護師の知識創造にとっても意義は大きい。



闘病記について

●門林(2011)

「病気と闘う(向き合う)プロセスが書かれた手記」
(2000年の定義)

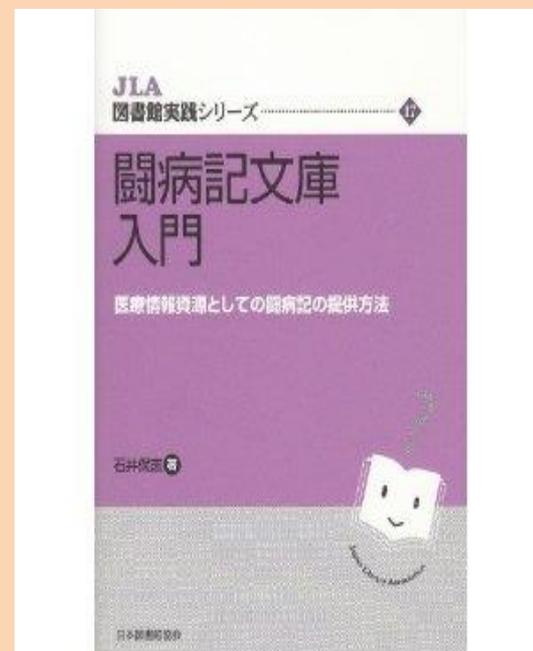
「闘う」⇒「共生・共存」へ変化、
病をもって生きる生活体験全体



●石井(2011)

「健康・医療情報における“生き方情報”」

治療法だけでなく、病気と生活に関する不安
や疑問について知りたい情報ニーズに応え
てくれる 絵本や医療マンガなど、医療資源
に思えない資料も医療情報資源



闘病記について



●八木 (2009)

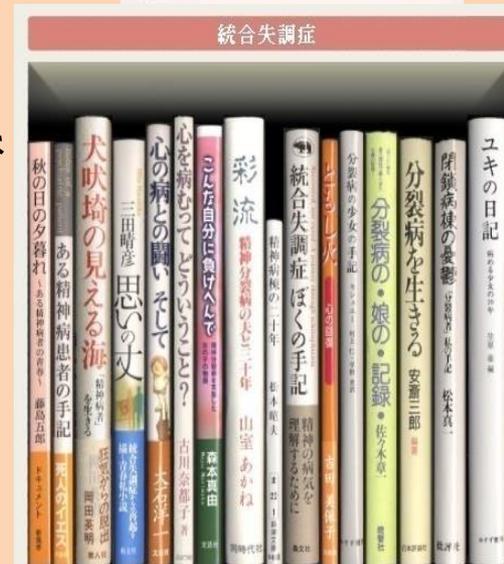
「精神医学がこのことに無関心であってはなるまい」
「手記を読んで、すでに慣れ親しんでいるはずの
この病について驚きを新たにすることが多かった」

●Kleinman (1988)

「病いは経験である」

病いの体験が生々しく当事者や家族などの言葉で
綴られ教材として豊かな学び・気づきを提供

「闘病記ライブラリー」のサイト <http://toubyoki.info/> より⇒



闘病記の意義



2017/3/16

- 入院中心の医療
⇒ 地域の中で当事者が生活するための支援
- 過酷な状況からの回復や克服
精神分裂病の呼称変更に見られる社会変革を起こす可能性

小平・いとう(2012)

第3章 『当事者が主人公』の実践の在り方を考える: 統合失調症当事者によるナラティブを手がかりに
いとうたけひこ(編)「コミュニティ援助への展望」角川学芸出版. pp. 70-94

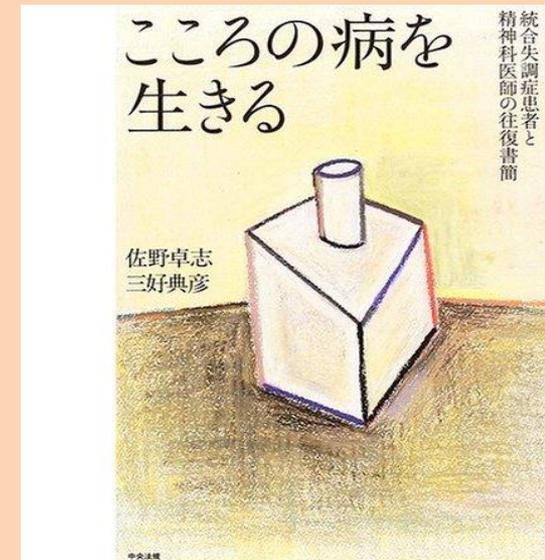
『こころの病を生きる：統合失調症患者と精神科医師の往復書簡』(2005) 中央法規

●三好典彦：精神科医師

「往復書簡が始まった経緯—まえがきにかえて」より
私と彼は統合失調症の自助について共同で研究している関係にある。
統合失調症を病む人々が自助を考えるきっかけになるのではないかと
私は考えています。(往復書簡開始2003年10月から)

●佐野卓志：統合失調症患者、精神保健福祉士

「現在のぼく—あとがきにかえて」より
ぼくは精神保健福祉士である前に一人の病者です。
この往復書簡も一つの事例検討でした。
今回の往復書簡はこれで一応の区切りをつけますが、
診察室での「共同研究」は今も続いていて、
今後が続くと思います。(日付2005年7月)



目的

- 本書は、患者と医療従事者の視点の相違を物語として理解する上で優れた闘病記である
- 本研究ではテキストマイニングの手法を用いて、その2者の語りの視点の違いを量的に分析することで、本書における病いの語りの構造における患者と医師の共通点と相違点を、質的分析とともに量的に明らかにすることを目的とする。

方法

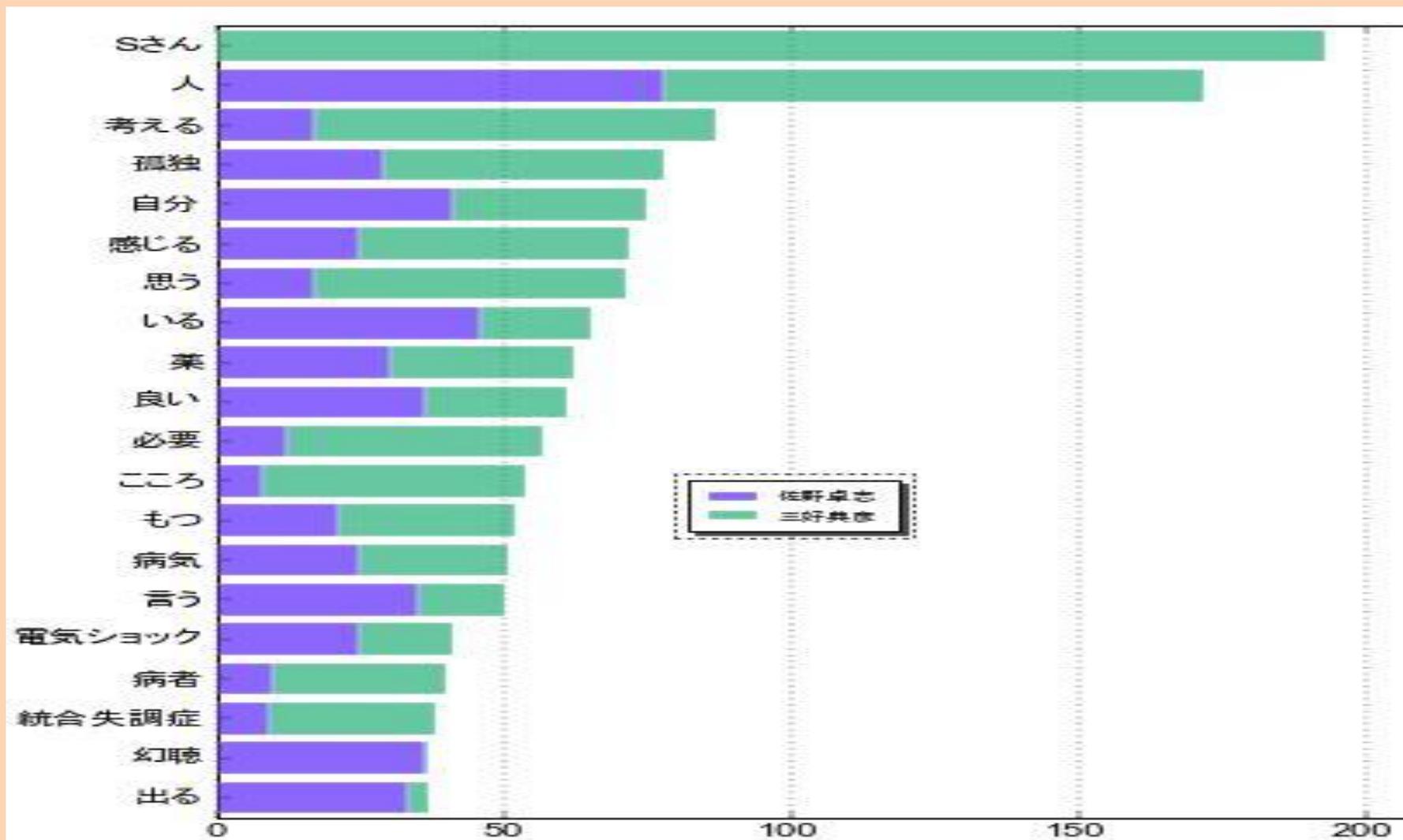


- 西平(1996)の伝記分析の考え方に基づき、医師と当事者の語りの**比較分析**を行った。
- テキストの量的分析には、Text Mining Studio Ver.4.2を用いた。
- 倫理的配慮：本書は一般に出版されている書籍であり著作権に配慮した。

結果:基本情報

	項目	値
1	章の数	24
2	各章の文字数の平均	2121.5
3	総文数	3877
4	平均文長(文字数)	13.1
5	延べ単語数	18559
6	単語種別数	5507

結果：名詞の出現頻度の比較



結果：特徴語分析

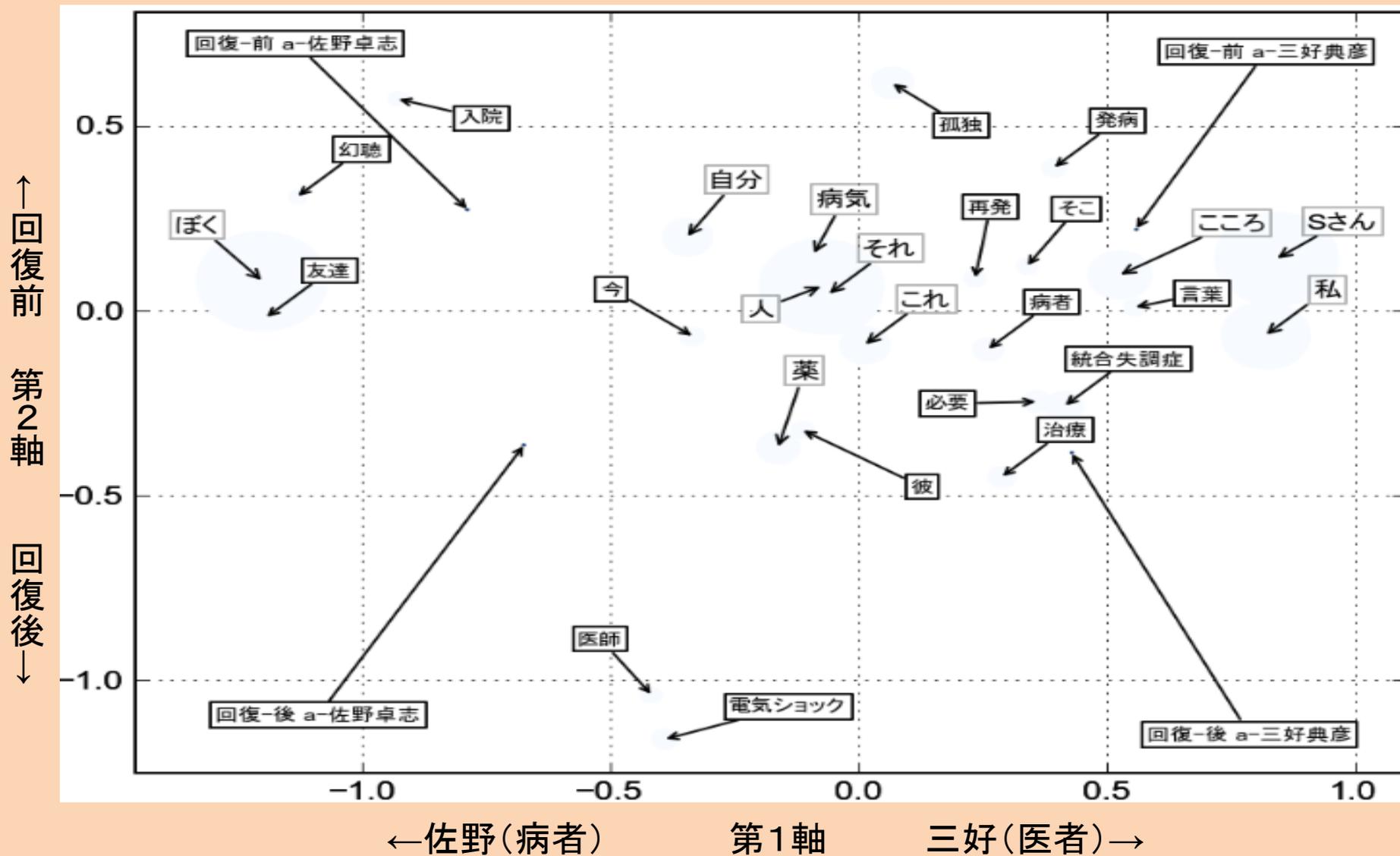
佐野卓志

	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1	いる	動詞	62	85	40.342488
2	幻聴	名詞	38	39	37.618331
3	出る	動詞	45	54	36.854264
4	行く	動詞	34	34	34.539273
5	友達	名詞	32	32	32.507551
6	先生	名詞	26	26	26.412386
7	飲む	動詞	26	29	23.459226
8	女性	名詞	23	24	22.380416
9	看護婦さん	名詞	20	20	20.31722
10	言う	動詞	40	62	18.977933
11	受ける	動詞	24	30	18.474344
12	病院	名詞	22	26	18.411395
13	作業所	名詞	18	18	18.285498
14	入る	動詞	23	29	17.458483
15	親	名詞	20	23	17.36406
16	大学	名詞	18	19	17.301111
17	眠れる	動詞	17	17	17.269637
18	入院	名詞	22	28	16.442622
19	H子	名詞	16	16	16.253776
20	寝る	動詞	15	15	15.237915

三好典彦

	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1	Sさん	名詞	193	193	189.986625
2	考える	動詞	84	103	63.387121
3	思う	動詞	79	106	50.338299
4	ころ	名詞	47	55	38.139285
5	必要	名詞	52	66	36.966052
6	感じる	動詞	61	86	34.651062
7	発病	名詞	31	36	25.436682
8	理解	名詞	26	29	22.54647
9	甘え	名詞	24	26	21.593558
10	波長	名詞	24	26	21.593558
11	語る	動詞	27	32	21.499135
12	統合失調症	名詞	31	40	21.373238
13	病者	名詞	32	42	21.341763
14	孤独	名詞	51	80	20.743751
15	言葉	名詞	24	28	19.561836
16	考え	名詞	22	25	18.608924
17	ころ苦しみ	名詞	19	21	16.671625
18	医者	名詞	19	21	16.671625
19	意味	名詞	20	23	16.64015
20	甘える	動詞	34	51	16.19951

結果：対応分析



結果：名詞の頻度と特徴語分析と対応分析より

- 著者毎の単語頻度の比較は、頻度の多い上位20語の図に示されるように、医師の三好の章では「sさん」「ころ」「病者」「言葉」「波長」「考え」の比率の多さが目立った。
- これに対して、当事者の佐野の章では「幻聴」「友達」「先生」「病院」「子ども」「女性」「親」という単語の使用数が多かった。
- 医師は「幻聴」「入院」に言及せず。
- 患者は「統合失調症」に言及せず。
- 「病気」「薬」は共通の話題であった。

考察1: 当事者と医師の語りの特徴

- 当事者の語りは、症状や人間関係についての記述が多かった。
- 医師の語りは、人間関係についてのものと治療のプロセス・メカニズムに関するものが多かった。
- 当事者と医療者との違いが単語使用や、本書のように、当事者視点と医療者視点が直接比較できる資料は貴重である。

考察2: 差異点＝こころの病と自我境界の解釈

●「こころの病」への主張の違い

佐野: ぼくは「こころの病」と主張したい (p70)

⇒ 疲弊したこころが癒されなければ回復はない

三好: 私は「こころの病」という表現に違和感 (p64)

⇒ 病者とこころが通じなくなってしまうイメージ

※八木(2009)も2人の主張の違いに着目している

●「自我の境界」について

佐野: 自我の境界を壊してでも他人と交わろうとする (p6)

三好: 「自我境界」という言葉を滅多に使いません (p37)

考察3：共通点＝看護(師)の重要性

●「治療的な雰囲気」と看護(師)への言及

佐野：看護師がそばにいてくれること。

看護者同士の仲がいいことも安心します。

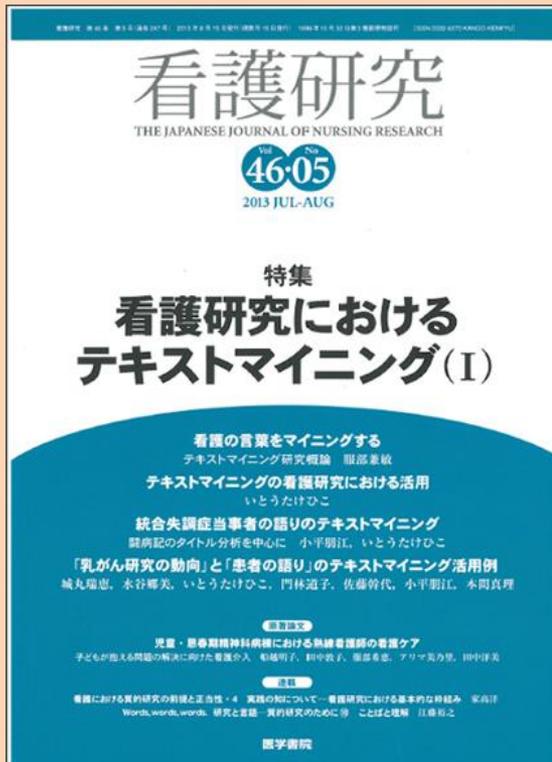
(p139)

三好：看護スタッフの治療的な影響力の大きさを
改めて実感します。(p96)

◎サリヴァンが「精神医学は対人関係の学問である」と定義し、ペプロウは「看護とは有意義な、治療的な対人的プロセスである」とした。

◎佐野は当事者の目線で医師との対話を通して「治療的な雰囲気」を検討しており示唆に富む語りである。このことは、武井(2005)が重視する看護師の存在と「治療的な雰囲気」に通じることである。

ありがとうございました ご自由にお取りください



- 本研究は平成23年度～平成25年度科研費基盤研究C(課題番号:23593195)の助成を受けた。